

「隼人舞」研究ノート

今 由佳里*

(2017年10月24日 受理)

A Preliminary Study of the *Hayato-mai* Sacred Music and Dance Performance in Japan

KON Yukari

Abstract

The Hayato were a tribal people who lived in southern Kyushu in ancient times, mainly on the Osumi and Satsuma Peninsulas in what is now Kagoshima Prefecture. There was a traditional sacred music and dance performance called *Hayato-mai* in this area, which was performed at the imperial court during the Nara period. Some theories suggest that it was related to the ritual of obedience to the Yamato Court.

Gagaku, the ancient imperial court music of Japan, has four genres, *Bugaku*, *Kangen*, *Utamono*, and *Kuniburinoutamai*, to the last of which belongs *Hayato-mai*.

Keyword : *Hayato-mai*, *Gagaku*, *Kuniburinoutamai*, *Haisei*, traditional Japanese music

はじめに

雅楽は、一般に舞楽（左舞・右舞）、管絃、^{うたもの}歌物（催馬楽、朗詠）、^{くにぶりのうたまい}国風歌舞に分類される。舞楽は、主として中国系の楽舞で唐楽を伴奏に舞う左舞と朝鮮半島系の楽舞で高麗楽を伴奏に舞う右舞に分けられている。左舞には、林邑楽に由来する楽舞、右舞には渤海楽に由来する楽舞がそれぞれ含まれている。管絃は舞を伴わない器楽の合奏、歌物は唐楽風の伴奏のもと、平安時代に流行した日本のはやり歌や民謡をもとにした「催馬楽」、漢詩に旋律を付けた「朗詠」がある。国風歌舞は、雅楽の中でも特別な領域で日本列島各地の^{かぶ}歌舞に由来するものや祭祀と関わりながら発達しているものがある。その主なものに隼人舞、^{くづのそう}国栖奏、久米舞と吉志舞、倭舞、田舞、^{ごせちのまい}五節舞、^{ゆき}悠紀、^{すき}住基の^{みはぶりのうた}風俗歌舞、御葬歌が挙げられる。本稿で対象とする隼人舞は、九州南部の薩摩・大隅地方居住民の歌舞で、奈良時代には朝貢に際して度々宮廷で奏されてきた歴史があるが、伝承はいつしか途絶え歌舞の実態は謎に包まれている。

本稿では、隼人舞にまつわる基礎的事項を整理し、隼人舞復元のための予備的な研究ノートとしてまとめることを目的としている。

* 鹿児島大学教育学系 准教授

1. 隼人舞の起源

隼人舞は、古代の九州南部薩摩・大隅半島に居住していた隼人族の歌舞であるが、その起源については明らかでない。しかし通説によると、『古事記』や『日本書紀』にある、海幸彦と山幸彦の神話に遡ることができると言う。隼人舞は、兄の海幸彦が水中に溺れ、弟山幸彦に服従を誓う場面に由来していると言われているのである。すなわち、海幸彦が水中に溺れた時の仕草を演じたのが、隼人舞の起源といわれている。したがって、隼人舞を朝廷で歌舞することは、忠誠を誓う服属の儀礼として捉えられていた。

2. 「隼人舞」の芸能

隼人舞は、現在でも霧島市隼人町にある鹿児島神宮の放生会ほうじょうえにおいて行われている。今日の隼人舞を目にすると、静かな愁いを帯びた舞という印象をうける。2016年に筆者が調査した際には、舞人一人、楽は太鼓と笛が一人ずつで構成されていた。以下に、隼人舞の舞振りについて下野（1980）の研究から引用する。



【写真1：放生会における隼人舞】

隼人は、麻製の淡水色の狩衣を着、同じく麻製のツメビシ紋様の頭巾をかぶり、右手に鉦、左手に中啓（扇の一種）を持っている。（中略）

琴の音と共に、隼人二人はたち上がり、前進。宮司が本殿へ昇り、御戸を開く。この時、隼人二人が、「オーオオオ……オ……オ……」と叫ぶ。書記に「吠ゆるいぬ狗に代わりてつかえまつるなり」と述べてある通り。ここでは隼人の吠ゆる声、すなわち警蹕けいひつで神霊を招くのである。この呪声は、「隼人の酋長」の子孫、小倉軍蔵さんによると、「ヤマオコ」（両端がとがった細い棒）の形のように、はじめ細く、次第に太く高まり、最後にまた細く唱えるのだという。

献饞、祝詞が終えると、いよいよ隼人舞。

- ① 一礼し、立って鉦を持ちかえ、右手を添えて左方へやり、中啓を右手に持ち、目通り上げて、右回り（時計と同じ）に三回歩き、
- ② 中啓を腰高におろして左回りに三回まわり、
- ③ 中啓を目通りに上げて右回り三回し、
- ④ 右足を一步だすと同時に中啓を開き、鉦を中啓にのせたまま右廻り三回、左廻り三回、右廻り三回、
- ⑤ 中啓と鉦を左肩に持ってきて、中啓は開いたまま目通りにて右回り三回、
- ⑥ 中啓を開いたまま後腰に持ってきて、左廻り三回、
- ⑦ 中啓は開いたまま右手を目通りに上げて、右廻り三回し、着座。円座に戻る。

このあと、玉串奉奠、撤饞、御戸とざし（隼人の狗吠えあり）、拝礼、退場という次第。

下野敏見『南九州の民俗芸能』より引用

奈良時代、隼人の朝貢に際して宮廷で奏されてきた隼人舞は、平安時代になると途絶えたといわれているため、現在の隼人舞が古代歌舞の系譜かどうかは明らかではない。下野は、「書記に記された隼人のわさをぎは『①足占、②足をあげ、③走り廻り、④腰をもちい、⑤手を胸におき、⑥手を上げてたびろかす（ひらひらさせる）』」を引用して、かつてはダイナミックな舞踊態であったことを考察するとともに鹿児島神宮の隼人舞の静かで荘厳な舞振りを「ほとばしる情熱をおさえ、精悍さを内に秘めた姿である」と評している。かつての舞振りは、水に溺れていく様を段階的に表していたものと推察される。水が足裏を濡らしはじめる様子から始まり、次に足を高く上げて迫りくる水を表現、腰や胸の位置まで水の増加がせまり、いよいよ水が顔のあたりにまで到達し溺れそうになり慌てふためいて手を高く上げてひらひらさせることで必死に助けを求める姿が表現されている状態描写を読み取れる。そしてこれらの違いについて、鹿児島神宮の隼人舞は、「狗吠えなど古代宮廷の隼人舞の系脈をひきながらも、雅楽の影響を受けて、非常に素朴ではあるが祭礼舞踊として完成している」と指摘している。また、一旦隼人から出た芸能が中央で完成し、再び隼人へ流入したこと、その際により古い隼人の芸能との複合がされた可能性についても付記している。隼人舞についてフィールドワークを行うと、度々鎮魂の舞ということばを耳にする。今日においては、大和朝廷に逆らい、乱をおこした隼人族を鎮魂するための舞が隼人舞という認識となっているのである。鹿児島神宮の隼人舞を実際に目にすると、下野が指摘するような静かで荘厳な舞と感じると同時に、舞人は終始伏し目がちに舞を舞い、太鼓と笛の音を伴奏として隼人の魂を鎮める鎮魂の芸能との声にも頷ける。一方中村（2000）は、舞のしぐさについて海の潮が満ちる度合いに対応して変化していると解釈し、その一連のしぐさは「阿多隼人が海辺で海神を迎える神招きのしぐさ」から起源すると考察している。なお、この舞を奉納するのは、代々隼人の子孫でなければならないという慣習がある。

歌舞の構成に関して『延喜式』には、^{みことひき}弾琴（二人）、吹笛（一人）、^{てうち}撃百子（四人）、柏手（二人）、歌（二人）、舞（二人）と芸態が明記されており、大嘗会には民俗歌舞を奏したともある。撃百子については何の音を示しているのか長らく不明とされてきたが、拍子木のような打ちつけるものという説が現在有力である。

3. 「隼人の楯」の紋様

昭和38年、奈良県の平城宮井戸跡から発見された板は、『延喜式』^{はやとのつかさ}隼人司の条に記されている隼人の楯であったと言われている。楯の表面には赤、白、黒で逆S字状の渦卷文をふたつ連結した文様が中央部に大きく描かれており、上下の端には鋸の歯のような三角紋がそれぞれ歯を内側に向けて縁どられている。この紋様に関しては、以下の記述がある。

【写真2：隼人の楯（奈良文化財研究所所蔵）】



隼人の楯の渦巻き模様は、マレーシアなど南方の楯の紋様に似ており、起源は向こうにあるのかもしれない。S字状の渦巻きについては、自分に敵対するもの（災いや悪魔）をその渦に封じ込めるためとか、目をくらませるためとかいわれている。いずれにしても敵を退散させるためのまじないの紋様であることは間違いない。昔の台湾や離島の海女は、渦巻き紋様などを手に彫り込み、サメなどから逃れるまじないとしていたという。

霧島市教育委員会『隼人族の抵抗と服従』より引用

隼人の楯の渦巻きの紋様に関しては、隼人舞の起源にも関わる海幸山幸の神話に関連して釣針を表し魔除けの意味を持っていたらしいという説もある。その昔南九州の海女は、手の甲にこの隼人の楯に描かれた渦巻きに似た美しい手甲紋入れ墨を施していた。それは海中でサメなど危険な生物に出会った時に、その紋を向けることで恐ろしいものの目をくらませるためと調査中土地の郷土史研究家からうかがった。隼人舞においても、この紋様に関して下野は以下の関連を指摘している。

盾と中啓を持って舞うときの足の動きは、ぐるぐると渦巻き型にまわり、逆まわりもします。すると、隼人の盾に似たようなS字型になるのです。ピナマキに通ずるものがあります。この場合は、竜蛇に起源する渦巻紋を描いて、悪霊を払う意味でしょう。

下野敏見『御田植祭りと民俗芸能』より引用

4. 隼人の^{はいせい}吠声

古代の隼人は特殊な呪力によって天皇に仕えてきたといわれ、「呪力は、とくに隼人の吠声にあった」との記述が見つけられる。大嘗祭や元日会、即位儀、天皇行幸時の折には、隼人は吠声を奉仕してきた歴史がある。『延喜式』隼人司の条には、朝廷の重要な儀式の際には隼人たちが儀式の進行に応じて吠声を発したとある。吠声に際して「隼人は左右に分かれ、左側が本声を発すると右側が末声を発し、大声で十編、小声で一編、その後一人がさらにか細い声で二編を発する」という式の記述がある。また天皇の行幸の際には、国界や山川道路の曲がりにおいて吠声しながら先導し、邪悪なものを追い払ったとの記録もあり、呪術的な側面が見られる。上述している鹿児島神宮の隼人舞においても、隼人舞の歌舞する前に「吠ゆる声」「警蹕」の文言が見られる。万葉集に「隼人の名に負ふ夜声いちしろくわが名は告りつつ妻と持ませ」の歌があるように、当時の都の人々にも特別な呪力を持つ隼人の声は周知されていたことがわかる。

おわりに

「隼人舞」の実態は不明というのが芸能史のなかでは通説であるが、鹿児島神宮の祭礼の中では隼人舞が奉納されてきた。しかしながら現在の隼人舞は、かつて隼人の乱に敗れた人々の

霊を鎮魂するための舞であり、先学の研究者が指摘しているように朝廷で歌舞されてきた舞とは異なるのではなかろうかと推察できる。また同じく鹿児島県の日枝神社でも隼人舞が舞われ、かつて古代隼人が朝廷に仕える際に居住した現在の京都府京田辺市の人々に受け継がれている。雅楽の中でも、大陸や朝鮮半島など他国の影響を受けていない国風歌舞は、古くから日本各地で祭祀や饗宴の場において歌舞されてきた。これら日本独自の国風歌舞の中には、大和政権の統一に伴い朝廷に服従した地方豪族がその忠誠の証として歌舞を献じ、宮廷歌舞の中にとり入れられた歴史もある。隼人舞も、歴史的経緯から読み取ればそのひとつとして位置付けられるのであろう。

楽譜の技術が高度に完成されてはいない時代、たとえ記録が残されていても簡易で備忘的な役割ではたらしきしかなかった。そのため、その時代時代の歌舞する者によって少なからずの解釈が加えられ、本来の芸態から少しずつ変化していくことは珍しくなく、限定的なひとつの形として残されることのほうが難しい。

本稿は、伝承が途絶えてしまいその実態は不明といわれている隼人舞について復元するための予備的作業としてまとめたものである。不備な点が多く残されていることについては否めないが、今後さらに舞の所作や楽の構成について検討を進めていきたい。

謝辞

本稿に際し、鹿児島神宮より写真1「放生会における隼人舞」写真掲載のご許可をいただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。同様に写真2「隼人の盾」画像資料を奈良文化財研究所よりご提供いただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

附記

本稿は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究「雅楽および関連芸能の歴史的音楽動作様式をさぐる－多様な解釈の可能性－」の一環として行っている研究成果の一部である。

【引用・参考文献】

- 井上辰雄『隼人と大和政権』学生社、1974
- 霧島市教育委員会『隼人族の抵抗と服従』
- 芝祐靖監修『雅楽入門事典』柏書房、2007
- 下野敏見『御田植祭り」と民俗芸能』岩田書院、2004
- 下野敏見『南九州の伝統文化 II 民具と民俗、研究』南方新社、2005
- 下野敏見『南九州の民俗芸能』未来社、1980
- 鈴木重温『せばる隼人舞』せばる隼人舞保存会、2002
- 中村明蔵『神になった隼人』南日本ブックス、2000
- 灰野庄平『大日本演劇史』第一書房、1932
- 林屋辰三郎『中世芸能史の研究』1960、岩波書店
- 隼人文化研究会『隼人文化』創刊号、1975
- 松村武雄『日本神話の研究』第3巻、1983
- 守谷俊彦『隼人舞と犬吠え』『神道学』(48)、1966